

企業としての判断について

1：どちらとも決め兼ねることは、どちらでもよい。

世の中にベターは有っても、ベストは無い。

物事は、長所と短所が並行しているから、この長短を比較するところに、どちらを採るかという悩みが生じる。

必然性と偶然性が並行して、ものは動いている。

「事を謀るは人にあり。事の成るは天にあり。」とは、諸葛亮公明の言ですが、一般的に例えると「事を為すは人にあり。事の成るは天にあり。」になります。

必然性は、誠意、努力、人事を尽くすことであり、

偶然性は、天に通ずる。道に生きることで生じる。

道だけが天に繋がっているということ。

時間・空間を超えて、何れの国にも当てはまり、如何なる時代にも当てはまる。

永遠に繋がっている道を歩むしかない。

「至誠天に通ず」である。

先ずは、己れの誠意を尽くすこと。

取り除くことが出来る世界は、人為のカテゴリー。

不可抗力としての失敗なら仕方ないが、注意に注意を重ねても、やっけて行けば、

せずに済む失敗なら、やはり注意が足らなかったと言われても仕方がない。

「叱ってやりさえすれば、注意さえすれば済む失敗は、叱ってやるのが大事。」

上に立つ者の第一の責任は、

一、 部下に不安を与えてはいけない。ということ。

上手な運転は、目的地に着くことよりも大切なのは、乗っている人に不安を与えない。ということ。

二、 相手のある仕事なので、こちらの思い通りには先ず動かない。ということ。

必ず修正が入るし、ある程度の妥協もしなければならぬ。

こうなると、早く決めないとギリギリの決定では、修正や相手に合わせるといふ途中の始末が出来なくなる。と言うことで、部下からすると、早く決めてほしい。ということになる。

更に言うなら「どちらが始末がし易いか」で決めてほしい。

後始末の準備の無い案よりも、後始末の準備のある案が優れている。

物事は全て、一本調子では進まない。必ずどこかで、修正を余儀なくされる。

妥協を要求される。

どちらとも決め兼ねることは、どちらが失敗後の後始末がやり易いか、

尻拭いがやり易いかである。

「逆転の発想」言葉通り、逆に考えてみる。こうすると認識が明確である。

「幸福とは何か？」漫然とした答えが返って来る。

これを「どういう状態が不幸だろうか？」と考えた場合、幸福の概念が浮き彫りになるのではないか。東洋の思想は、否定を通る。

一旦、否定が入ると、認識が明確になる。

2：督促に関して注意すべき事。

顔を見せて行なわないと誤解を招く。

ハプニング、手違いが生じることによって、段取りよく行かないという結果が生じる。それでも能率が上がらないという事実について、幹部足る者は責任を持つべき者。結果について言い訳の通らないのが、トップ、幹部足るべき者全てに共通していることは「結果について責任を取る」こと。

督促も結果が悪ければ、誠意の如何に関わらず、督促しなければならない。

「お前は何をしているのか！」→「その通りだが、こちらも誠意を込めて一所懸命なのに、、、」と反感を買う。一寸の虫にも五分の魂である。

顔を見せて言うと、励ましなのか？立場上の発言なのか？

ニュアンスの違いについて、叱られる側も、少しは心が慰められるもの。

それが顔を見せないと、表情が分からず、感情的な反抗が湧き易い。

3：計画の在り方とは。

例) 信長の死を知った秀吉の事例

目的は、自分が天下を取る。方針は、自力での仇討ち。

そして内部闘争なしの後継者決定。

指導要領は、方針に対して毛利との和議を急ぐこと。次に速やかなる引き揚げ。

そして、秀吉苦戦のデマ（味方を欺く）最後に、戦場の決定。

宇喜多親子を軍使に立てる（毛利との和議）→偽兵を用いる（速やかな引き揚げ）

→隠密を用いる（デマ）→内部闘争なしの後継者決定には、三法師丸を担ぐ。

大義名分（単独で葬儀）順序を踏まず、いきなり具体案を考えると対局を見失う。

計画に対する注意事項

1. 目的の明確化である。（ボヤけないこと）

キチっと焦点を絞ること。精神論ではいけない。

2. 情報に関する注意事項として、必要最小限の情報しか集まらない。

何が、必要最小限かを定める。情報は手に入れた段階から古くなる。

間に合う情報は本当に僅かである。

3. 最初から具体案を考えると対局を見失う。

対局の上に立って自分はどうしなければならないか、を考慮すること。

4. 具体案は必ず複数用意すること。長所と短所の列記。その順位を明確に。

この場合の一番妥当を提示すること。

5. 時間掛かることは、分かるか否かに関わらず、早く着手すること。

人材育成なんかは、早く着手すること。

6. 失敗しそうな問題や困難な問題から着手せよ。

7. 代数式を用いよ。未知数を既知数に置き換えること。

考え抜くしか、道は無い。